
月に舞落ちる花びら

真紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に舞落ちる花びら

【Nコード】

N1021E

【作者名】

真紅

【あらすじ】

外国で両親と暮らしていた水谷紫水はある日不思議な夢を見る。その夢を毎日見ているうち紫水は五歳まで住んでいた日本に帰りたくなる。そして、紫水が日本で住みはじめた最初の日に見たものは

プロローグ

オレは、今日不思議な夢を見た。誰か分からない奴がオレの名前を呼んで、日本に帰ってこいというのだ。オレは、ただの夢だと思っ
て放っておいたが、毎日その夢を見ているうちに明らかな不信感を
持ち日本に行こうと決めた。両親は反対した。

理由はオレは昔五歳の頃、日本に住んでいて行方不明になったこと
があったからだ。オレもその時のことはあまり覚えていない。

だが、近所にとても世話焼きの一つ年上の女の子とよく遊んだのは
覚えている。たった、そんな事しか覚えていない。

オレは、どうしても日本に行きたかった。いや、夢の正体をどうし
ても知りたかった。オレの決意に両親は渋々日本行きを許可してく
れた。

「辛かったらいつでも戻っておいで」と空港で言われオレは日本に
旅立った。

プロローグ（後書き）

小説を書いたのは初めてではないのですが、とても下手くそです。
できれば完結するまで読んでくれたら幸いです。

1話 新しい生活（前書き）

1話です。少し長いような気もしますが、まあ1話です。新しい人も出てきます。

1話 新しい生活

約十年ぶりの日本は、すっかり変わっていた。

オレは、記憶を頼りに昔自分が住んでいた場所を目指した。もう日が傾きはじめている。

そして、オレは昔住んでいたアパートに着いた。アパートは古くなり、所々壁が剥がれていた。アパートの壁には『入居者募集中。入居希望の方は301号室の草芝迄』という紙がはられていた。

「十年前はあんなにきれいだったのに…」

オレは、まだきれいだった頃のアパートを思い浮かべた。ここに来て眠っていた記憶がだんだん目を覚ましてきたようだった。しかし、あの子の名前と顔が全く思いだせない。オレは、とにかく大家らしき草芝さんの部屋に行く事にした。

オレは301号室の前に立ち、インターホンを押した。しかし、誰も出て来ない。オレは、留守かと思いオレは草芝さんが帰って来る迄待つ事にした。五分、十分ドアの前で待っていると足音が聞こえてきた。

「あら、うちに何か用？」

草芝さんらしき人はオレに言う。

「あ、貼紙を見て…」

「まあ、入居希望者！？部屋はがらんがらんだから好きな所使って中はこの部屋もきれいだから。あ、私は草芝明クサンバアキラよろしくね！」

草芝さんはオレに鍵を見せながら言う。

「オレは、紫水です。水谷紫水ミズタニシズミえーとじゃあ402号室で」

オレはそう言い草芝さんから402号室の鍵を受けとった。

「私、いつもこの部屋にいるから何かあったら言っつてね」

「あ、ありがとうございます。草芝さん」

「明でいいわよ」

「あ、明さんありがとうございます」

オレは、明さんにお礼を言い、自分の部屋にへ向かった。場所は、ちょうど明さんの部屋の真上だった。部屋に入ってみると、少し小さいがきれいに整った家具が部屋に置かれていた。キッチンも風呂もトイレも完備されている。

「へえ、なかなかきれいだな。明さんの言った通りだ」

その時、カタツと後ろの押し入れの中から物音が聞こえた。オレはビクツと後ろを振り向く。

「だ、誰だ！」

オレは押し入れに向かって言う。しかし、返事がない。オレは、そろそろ押し入れの扉を開く。

…そこには少女が気持ちよさそうにすやすやと眠っていた。

1話 新しい生活（後書き）

変な展開ですが、いい所で1話が終わったかな。って感じですよ。次回から、登場人物のプロフィールをのせようかなあって思っています。

2話 天使!?

(何故だろう。俺の部屋に何故女の子が眠っているのだろうか。あの
人、何も言っただけじゃなかったぞ。)

俺は、とりあえず女の子を起こす事にした。

「おい。君、起きて」

俺は、女の子に声をかけるが無反応。

「君、部屋間違えてるぞー」再び、声をかけるがまたしても無反応。
俺はだんだん反応のない女の子に腹が立ってきた。

「おい！お前いい加減に起きろ！」

女の子の耳元で言うと、

「ふえ？」と、呑気な声が返ってきた。

「お前、寝るなら自分の部屋で寝ろ」

俺は、女の子に部屋を出るよう促す。

「何、言ってるのよ！ここは、私の部屋よ」

長い髪を鬱陶しそうにふる。

「はあ！？この部屋は俺がたった今、管理人さんから借りた部屋だぞ？」

「ここは、私の部屋ったら私の部屋なの！」

女は、ここが自分の部屋だとめっちゃくちゃな主張をしている。なん
ちゅう、女だ。

「お前、それより押し入れから出る」

俺は、女の細い腕をつかみ力付くで押し入れから出す。…浮いてい
る。

女は、ひどい男ね、と腹を立てている。

「おい！お前、何で浮いて…」

「私、天使だから」

俺の問いに女はキツパリと答えた。

「天使だって!？」

「うん。そう天使」

女は間髪を入れず言う。

「この純白の羽根が証拠よ」と、女は俺に背中の中の羽根を見せる。確かに女の背中には純白の羽根がついていた。俺には、信じられない出来事だった。

「いや、天使なんてこの世にはいないんだ。お前、実は幽霊だろう！」

俺は、目の前の現実から逃げたかった。

「幽霊なんかじゃないわよ！あんなのと一緒にしないで欲しいわね。

私は、天使のアイリンよ」

アイリン…この女の性格には似つかわしくない名前だ。

「よし、100歩譲ってお前、アイリンが天使だと認めてやろう。

その代わりに、この部屋から出てけ」

我ながらナイスアイデアだ。だが、俺はお前の事を信じちゃいねえ。

この場しのぎの大嘘だ。

「やあよ」

「な、何でだよ！」

「私、この部屋気に入ったもの。あんたっていう人間もいるしね。

それよか、あんたの名前は？」

何でだよ。俺は、わざわざ日本に何しにきたんだよ。だが、こいつを利用する手はきつとある！

「紫水だ」

「じゃっ！紫水これからいろいろよろしくね？」

今日から俺と天使（俺は絶対信じちゃいねえ）の奇妙な同居生活が始まった。

3話 手がかり（前書き）

あの子についての手がかりそれは一体何だろう

3話 手がかり

自称天使は、いつの間にかこの押し入れで寝ていたと言う。

俺は、自称天使アイリンに質問をしまくった。結果、分かった事は自分が多分死んでいるという事、この部屋からはあまり出られないという事だった。多分って…自分の事だろう？と聞くが、アイリンはだって全く覚えてないんだもん と呑気に答えた。あまり外に出られないのは、時々ひどい頭痛に襲われるから出る事ができないという事だった。

俺は、今日は出られるのか？と聞くとアイリンは本当につらそうに頭を押さえて無理とだけ答えた。俺は仕方なく一人で調べものをするため、外に出た。

一応念のため、鍵はかけておいた。

「あいつ、大丈夫かな」

言ってから気付いた。

「何で、あいつの事気になるんだ？」

あわよくば、理由しようと思えていたのに…

「まあ、仕方ないよな。あいつ、本当につらそうにしてたし」

と、俺は思う事にした。

しかし、俺の帰国の理由になっているあの子についての手がかりは全く見つからない。

まずは、あいつの言っていた多分自分は死んでいるという言葉。

俺と同じ年ぐらいの子が死んでいる（多分）のだ。あいつが死んだ（多分）理由を知りたい。死んだ（多分）理由はだいたい見当がつく。事故か事件。理由は多分そんなところだろう。あいつの死んだ（多分）理由を知る事があの子についての手がかりを知る事につながるかもしれない。

俺は、一筋の手がかりを手にまず市役所へと向かった。

4話 市役所

「市役所ってどこだ？」

オレは、早速迷っちゃったよ。まあ、仕方ないよな、日本なんて久しぶりなんだし、町だって色々変わってるしさ。ああ、あのオレの記憶にあつた綺麗な町は何処にいつてしまったんだろうなあ。

そんなことを一人で黄昏ていると目の前に立派な建物がある。横の看板には『市役所』と書いてあつた。

「オレって、スゲー。適当に歩いてたら、目的地に着いちゃったよ」
オレは、迷わず市役所に入り、受付に向かった。受付には、親切そうなお姉さんがいた。

「あのーすみません」

「はい。なんででしょう？」

「突然すみませんが、オレ探している女の子がいて、人づてにその子が亡くなったということを知り、本当なのか調べて欲しいんです（大嘘）。」

ああ、お姉さんすまない。オレの大嘘にひっかかってくれ。

そんな、オレの祈りが届いたかのように、お姉さんは

「その子の名前は？」と聞いてきた。

オレは、心の中でガッツポーズを決める。

「あ…、名前はわからないんですよ。年は、オレより（15歳）いっこ上位なんですけど…」

オレが、そう説明すると受付のお姉さんは、後ろの棚から何冊かの

ファイルを取り出しペラペラとページを開いている。

オレが、上の空でいると受付のお姉さんは、声をかけてきた。オレは、すぐさま視線をお姉さんに向ける。

「最近亡くなった貴方よりいつこ上位の女の子はこの子だけね」と、お姉さんはオレに写真を差し出した。オレは、差し込まれた写真をじっくり見るが自称天使アイリンとは全く似ていなかった。いや、天と地の差でこの写真の女の子の方が断然可愛い。

「あの、この写真貰っていいですか？」だが、オレは念のためにこの写真を貰う事した。お姉さんは快くこの写真をくれた。

オレは、お姉さんに一礼して市役所を去ろうとしたが、入り口手前で受付のお姉さんに呼び止められた。

「貴方、名前は？」

いきなり、名前を聞かれたので少し驚いたが、答える。

「紫水…です」

「私は、渚。また、何かあったら遠慮なくここに来てね」

渚さんは、笑顔でそう言う。その笑顔にオレも自然と顔が綻ぶ。オレは、

「はい！ありがとうございます」と言い、帰路についた。

紫水が市役所から、去った後、渚は、

「紫水…どこかで聞いたことが…」と呟いていた。

紫水は、その頃自称天使アイリンが家つ何をしているのかが、気になつて仕方がなかった。

案の定、紫水が危惧した通り、家は泥棒にでも荒らされたかのよう
にぐちゃぐちゃになっていた。

それから自称天使アイリンは、紫水にこっぴど怒られたとか…

5話 夜（紫水編）

オレは、あれから自称天使アイリンをみっちり怒った。あいつ、オレがいない事をいいことに部屋中を泥棒にでも荒らされたかのようにぐちゃぐちゃにしゃがった。

まあ、一応反省してたみたいだから、許してやった（アイリンは、その時ニヤツとしてたが、紫水は気付いていない）

オレは、その夜市役所で渚さんがくれた写真をベッドに寝転びながら見ていた。時々、自称天使アイリンが寝ている押し入れ（結局ここに居候中）から、怪しい寝言が、聞こえてくる。

「卵があ、卵があ」とか。一体何なんだ。

オレは、何故かこの写真を見ていると懐かしい気分になった。心の奥深い場所が暖かくなるような、そんな感じに。

オレの何かが、叫んでいるんだ。オレは、この子を知っている。知っているんだ。きつと、この写真の子とオレが、探しているあの子は繋がっている。

そんな気がした。ただ、そう思ったただけだが、何処か懐かしい思いを感じたんだ。

だが、この写真を見ていると同時に悲しみも浮き上がってくる。今だけは、10年前の事がうる覚えなのが最初の時より腹ただしくなった。

それと同時に、絶対10年前のあの子を見つけようと改めて決意し

た。そう決意しているとオレは、眠くなってきたので、写真をテーブルの上に置き、布団を被り眠った。

紫水が眠った後、押し入れからのその自称天使アイリンが出てきた。アイリンは、紫水が置いた写真を手に取るとそれをじっと見つめる。そして、一言

『もう時間がない』

そう呟き、再び押し入れに戻った。

5話 夜（紫水編）（後書き）

今回は、紫水と自称天使の2視点に分けてみました。自称天使編は6話に載せようと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021e/>

月に舞落ちる花びら

2011年1月7日02時25分発行